１９７８年６月２１日　　共同通信　全国配信　各地方新聞掲載
『中国新聞』　　中村輝子

波乱に満ちた自立への闘い
個人通信「あるはなく」発行　　八木秋子さん
家を捨て子とも別れ　　良心に生きる老女の叫び

八十三歳になる一人の女性が、今、老人ホームの雑居生活の中なら“老衰と退歩に抵抗”し、個人通信「あるはなく」を出している。その長い、自立への闘いから生まれた彼女の言葉は、友人、読者の間に大きな反響をよんでいる。

「女人芸術」で活躍

　八木秋子。かつて林芙美子、吉屋信子らとともに「女人芸術」で活躍、さらに絶対自由を求めるアナキズムの雑誌「婦人戦線」を高群逸枝、住井すゑらと発行し、昭和のアナキズム運動に足跡をとどめた女性。
　この四十年間は、母子寮の寮母をしたり、地域活動に加わったり、ほとんど無名のまま、ひっそりと日本の底辺の生活を見つめてきた。詩人・秋山清氏よれば“自己の足跡を消しつつ生きる姿”なのだった。
　しかし、最近、昭和初期の「女人芸術」「婦人戦線」「黒色戦線」などに掲載された小説、評論、紀行文などをまとめた著作集「近代の<負>を背負う女」（JCA 出版）が出版された。相京範昭さんという若い友人の励ましと努力によるものだった。個人通信も本も相京さんの八木さんに対する深い共感から生まれたといえる。

老人ホームで生活

　梅雨入り前の、さわやかな風が吹きぬける、ある日、八木さんのいう“前途に安全はあっても道のない老人の国”に彼女を訪ねた。東京都立養育院の、希望していた軽費老人ホームは待機者が多く、また保証人の問題もあって、生活保護法の適用を受ける雑居寮の方に住まう。一年半前に入居。
　「入居後、一ヶ月ぐらいたって、耐えられなくて抜け出したんです。四日ほどさまよいました。相京さんの所にも立ち寄って、その時ゴッホの画集やシベリアの画集を夜を徹して見つめていたというのです。けれどここを飛び出しらどこにも住みかはない、ここが最後の所なのだと帰りついた時は、自分でもショックでね、いろいろ考えました」
　貧しい独り暮らしながら、手を伸ばせば書物があり、ノートがあった自由な生活から、わずかな私物を持って四人部屋へ。それは一層深い孤独だっただろう。

すべてをさらけ出す

　その後、個人通信に、これまで波乱の生を歩み、また今、養老施設に身を沈めて生きつつある自分を書いてみよう、と決心する。きっかけは、相京さんの言葉だったという。
　“あなたは愛のない結婚から離脱した時、幼いわが子とも別れてきた。その後の思考や行動の原点にあるのはその体験ではないか。それをさらけ出して自由になることからー”と。
　こうして、現在五号まで出ている通信は、長野の木曽福島に生まれた八木さんが、幼年からキリスト教の影響を受け、結婚し子供を持ったが、小川未明、有島武郎らを知ったことから家を出た体験を語って、始まる。
　「どんな文章になるか、表現になるか、見当つかぬまま、とにかく書きたい衝動が強いのです。でもいつもそうだったのです。先人の書いたものより私のは軽い。高群逸枝さんの仕事をみると大変な文献を読み通しての積み重ねですね。わたしはパッと思いついてすぐに行動に移して没頭するような情感派だから書くものも飛躍が多いのですよ」

亡き父との幻の対話

　八木さんの自己診断はさておき“生きるかぎり闘う良心から身もこころも離さない、しかも自由人でありたい”とひたむきに生きてきた彼女の肉体をくぐって生まれた言葉には、真の思想といえるものがある。知識の再構成ではない、人間そのものをあらわにする言葉がある。
　神近市子がやめたあと東京日日新聞社で活躍、その後昭和のアナキズム運動に身をていして逮捕されるなど、変転きわまりない八十余年が、これから少しずつ記されるだろう。四号で「独房」と題して、八木さんは刑務所にあって、亡き父と幻の対話をする文章を載せている。“最も心にかけてくれた人”との対話の中に、家を捨て、自立を求めた八木さんの声が、父への哀唱となって響いてくるのだった。

（ＪＣＡ出版は東京都千代田区神田神保町一ノ四二　日東ビル）